

## 日本列島の国際化に寄与した玉作

北條芳隆

### 講演の概要

日本列島に生きた人々にとって、玉はどのような存在だったのでしょうか。ネックレスやブレスレットとして利用されるようになったのは、洋装が一般的となったごく最近のことです。和装の女性が重視したのは髪飾りでした。玉はその部品で、かつ添え物だったのです。

その反面、玉は仏具や祭具でした。色味は無色透明なものが多く、デザインも数珠玉や丸玉 など個性を欠くものが主体だったようです。例外は琉球王国で、女性司祭は弥生・古墳時代の勾玉を祭具として珍重し再利用しました。ただし日常的な装飾品ではありませんでした。概して抑制的な玉の利用だったのです。

その一方、弥生・古墳時代に玉は各地でさかんに作られました。その代表格が出雲玉作遺跡です。玉は古墳の副葬品としても馴染み深い存在です。では倭人と呼ばれた当時の人々は玉を身体への装飾にもちい、お洒落を楽しんだのでしょうか。弥生時代の後期まではそうだった可能性があります。しかし古墳時代についてみれば答えは否定的です。

玉には海外の人々をも惹きつける魅力がありましたから「国際貨幣」としても通用する存在でした。商品として高い価値をもち普遍的に流通する力を十分に備えていたのです。その力が分散するとどうなるか。社会をまとめる方向には逆行しかねません。

だから国内での流通には制限を加える努力を怠らなかったのが新生の倭王権（ヤマト政権）でした。専買（売ではない）制とでもいうべき玉の独占的な買い付けと王権からの贈与財とする ことを狙ったのだと思います。海外向けの贈答用に玉が選定されたことをみても、こうした王権側の意向がうかがえます。玉の魅力は社会の秩序を崩壊させかねない危険性を孕むものでしたので、その流通を差配し統制する努力は不可欠だったのです。その結果、玉を添えられお洒落を楽しんだのは死した首長や王となり、偉大な首長たるべく古墳づくりに膨大な散財を強いられたともいえるでしょう。こうすることで死せる首長は民衆の心をつなぎ止めることに貢献し、倭人としての社会のまとまりを子孫たちは維持できたのだと推測します。

だから古墳時代以降の玉は祭祀や葬儀のアイテムに特化する傾向を示し、やがては仏具に転じる宿命を負ったのだと理解できるのです。記紀神話に玉が頻出する理由もここに 있습니다。仮に民衆にとっても身近なお洒落のアイテムだったとすれば、そうはならなかったでしょう。

その意味において、古墳時代の後半になると出雲でしか玉作が行われなくなった理由も察しがつきます。主たる購入者である王権側の意向を汲み取った装飾貨幣としての玉の独占的生産拠点、これこそが出雲玉作の正体だったといえるのではないのでしょうか。花仙山産の玉や腕輪形石製品をみると格段に美しいことも、一役買ったのだと思います。

ようするに古墳時代の日本列島における玉作は、倭国が一体としてのまとまりを保つためにこそ寄与し、主体性を維持しつつ国際化を果たせたというのが私の主張です。

以下の頁には主要なスライドを示します。

### 新相の大型建物を囲む方形区画と三輪山

弥生中期後半以降は冬至の日の出方位＝三輪山が重視される



唐古・鍵遺跡の新相大型建物と方形区画

**折口信夫の見解**  
タマフリ=のちの鎮魂祭

勾玉を「冬至の朝日」に捧げ、弱まった陽光の再生を祈る 奈良盆地 弥生時代中期後半の祭祀

三輪山山頂を向く  
冬至の日の出

### 鎮魂祭：霜月（十一月）の眞の日（新嘗祭・大嘗祭の前夜）

鎮魂の儀では、宇氣槽（うきまね、うけまね）と呼ばれる箱を伏せ、その上に「**五**」が乗って「**宇**」で宇氣槽の底を10回突く「宇氣槽の儀」が行われる。これは「**五**」の埴面において「**宇**」が箱に乗って語ったという伝承に基づくと考えられている。「**五**」に「**凡**（おふ）」で鎮魂の儀は、天照女命の遺體（あと）なり」とある（Wikipediaより）。








### 天の石窟伝承と冬至祭

弥生時代の唐古・鍵遺跡で開催された冬至祭が記紀に記された天窟伝承の原型であり、それは赤色野鶏が冬至の朝日を誘い、勾玉が捧げられる祭祀であった可能性は高い

鎮魂祭において「宇氣槽の儀」を執り行う役目が女官であったことは、太陽神が本来は男神であったことを物語る



五百席御統（勾玉）

常世長鳴鶴

### 勾玉を奉納する対象の変化—太陽から死せる王へ





弥生時代中期（紀元前1世紀）の奈良盆地—  
冬至の太陽 のちの大嘗祭・鎮魂祭の起源となった冬至の祭祀

主催者は司祭と地域集団の全メンバー

弥生時代終末期（西暦2世紀）の伊都国—奉祭先は死せる伊都国王  
で冬至の太陽は墓前祭祀の祭礼日  
主催者は次世代の奴国王

古墳時代中期初頭（西暦4世紀）の奴  
国—奉祭先は奴国内首長で冬至の太  
陽は埋葬祭礼日  
主催者は次世代の首長

太陽と死せる王を合一化する志向性

三種の神器のひとつとされる勾玉は何を象徴したか



私案は素材を異にする三種の宝器説

玉＝石  
剣＝鉄  
鏡＝青銅

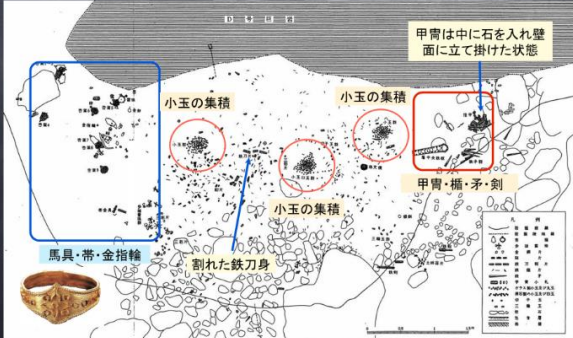
勾玉＝月＝ツクヨミ

鏡＝太陽＝アマテラス

古代史学の水野祐説『勾玉』

草薙剣＝暴風・大地＝スサノオ

ただし鏡は太陽と月の双方の表象だった可能性も高く水野説には従えない



甲冑は中に石を入れ壁面に立て掛けた状態

小玉の集積

馬具・金指輪

割れた鉄刀身

甲冑・櫛・矛・剣

本遺構の調査担当であった原田大六の詳細な記録を受けた益田勝実の解釈

日本文学者 益田勝実

沖ノ島第7号遺跡の遺物出土状態(『沖の島』報告書より)

武装し待ち構えた人物と馬に乗って来訪した人物が両脇で対峙し、両者の中間地帯には玉に身を包んだ3人の人物が居座る構図

沖ノ島第7号遺跡は「天安河誓約」の原風景を示し宗像三女神は玉によって表象された



紀元6世紀代に実施された沖ノ島祭祀には、宗像三女神の誕生場面の再現が含まれていたと考えられる。

それが『古事記』『日本書紀』に採録された可能性は高い

国文学者 益田勝実の解釈の重要性

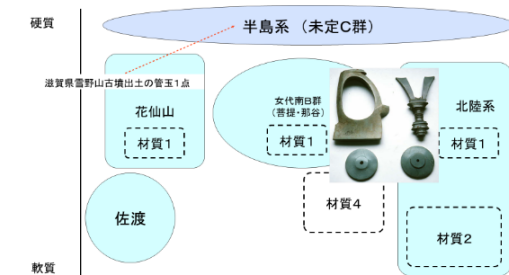
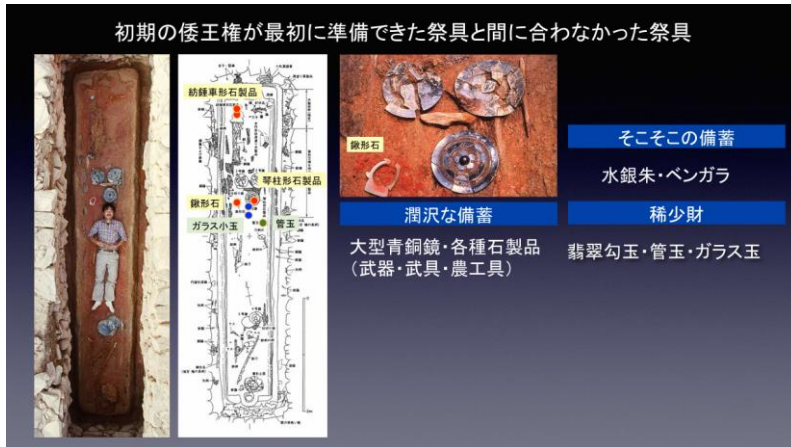
ただしその原像は、新羅から到来した男王と、それを迎え撃つ完全武装の倭国王が対峙し、ウケヒによって双方の交流が円満に解決したことを祝福する祭祀であった可能性がある。



瀬戸内系滑石製勾玉1点

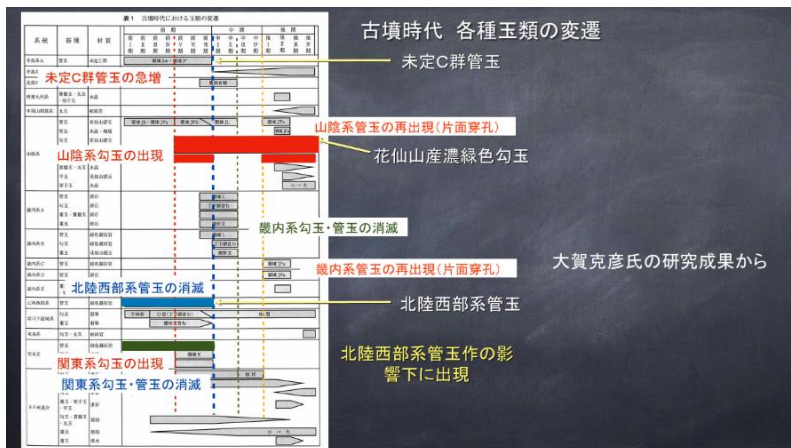
静岡県沼津市高尾山古墳





雪野山古墳の管玉1点だけは舶来品で、当時は入手しにくい貴重な装飾品だった可能性が高い

玉類と石製品の素材にみる相対的位置





後円部からは礫敷きの埋葬施設(礫塚)の端部が発見された  
(遠江地域からの影響)



管玉は「地産地消」ではなく、海老名本郷遺跡産の管玉類は一旦別のところ(本家筋)に集積され整えられたのちに各地の古墳造営者に向けて贈与された可能性が高い。大神大塚古墳の造営者には北陸西部系の玉が贈与された

北陸西部系管玉 1 点を検出

玉川産の緑色凝灰岩ではなく  
北陸産の石材で径3.5mm

寒川町大神塚古墳の発掘調査

## 5. まとめー日本列島の国際化に寄与した玉作

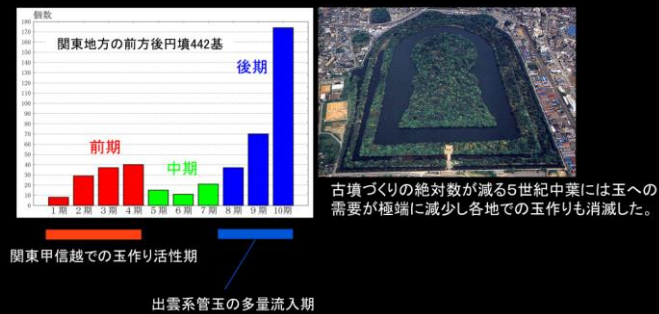
### 「国際化」のふたつの側面

中国・朝鮮半島の不安定な情勢に対抗策なく巻き込まれるという意味での国際化  
倭人社会の緩慢なまとまりを維持するための対策を講じるという意味での国際化

玉の魅力は社会を崩壊させかねないので、玉作を「出雲ブランド」に収斂させ倭王権側の関与を担保することにより、無用な混乱を回避した可能性がある



## 玉つくりと古墳づくりは正の相関にある



古墳づくりの絶対数が減る5世紀中葉には玉への需要が極端に減少し各地での玉作りも消滅した。

玉は祭具として製作され消費された(装飾品ではない)

### 弥生時代後期の倭人社会

玉は生産地から消費地まで随時 市場交換を通じて流通し消費された可能性  
魏志倭人伝に記された「国市有無交易」が根拠

### 初期倭王権 女王壺与の治世下(国のまとまりを目指し始めた時期)

一時的に玉が欠乏。三角縁神獣鏡や腕輪形石製品のストックは豊富

### 古墳時代前期の倭人社会

玉への需要の増加を受けて各地で玉作が本格化

未定c群の輸入も再開し管玉のストックが回復

各地の玉を王権が主体的に購入して要所に集積  
させたのち古墳造営者に贈与

### 古墳時代中期(5世紀代)の倭人社会

玉づくりは出雲玉作遺跡と大和蘇我遺跡に収斂させた

古墳での祭祀用のほか各地の山の神などへの奉祭用に滑石製の模造玉類を加えた

5世紀末には精巧な翡翠勾玉が新羅王権に贈与された

### 古墳時代後期(6世紀後半代)の倭人社会

日本列島内の玉作は出雲玉作遺跡のみに収斂

石製玉は「出雲ブランド」となる

後期群集墳の爆発的増加にも対応

### 古墳時代の倭人社会と玉

一貫して首長間の贈与品となり市場流通を制約



慶州天馬塚出土金冠

### 玉は世界史上、最古の装飾貨幣であった

\* 旧石器時代の貝製ビーズはユーラシア大陸の奥地まで流通

\* 貨幣はほとんど常に、第一に人間を装飾するために使われる物品からあらわれている(デビッド・グレーバー『負債論』から)

\* シュメール時代の富める女性が身につけた銀製の腕輪や足輪は彼女の「花嫁代償」と同じ値段であったといわれる

\* 16~18世紀の大西洋奴隷貿易: ガラスビーズは西アフリカ各地の首長国から奴隷を購入するための主要な原資であった



装飾貨幣は誰もが「美しい」と感じ相応の「価値」をみいだす反面、それ自体では「価格」がわからない

贈られた側は贈った相手に負債観を抱く

装飾貨幣は「人間経済」をとりもつ

### 魏志・馬韓伝

「環珠をもって財宝となし、あるいは衣に綴りて飾りとなし、あるいは頭に懸け耳に垂る」

「珍宝を産出せず」

### 魏志・倭人伝

「男子は大小となく皆鯨面文身す(中略)諸国の文身各々異り、あるいは左にしあるいは右にし(中略)。朱丹を以てその身体に塗る」

「真珠・青玉を出す」



女王舎与から魏王朝への朝貢品に「白珠五千孔・青大勾珠二枚」

### 穀物貨幣と装飾貨幣

#### 穀物貨幣



稲束「1握」

精米後には5勺で美味しい  
現代の白米で半合

価値が計量可能

#### 装飾貨幣(従来の威信財)



見慣れない形状

美しい⇒鑑賞に耐える  
入念な仕上げ

価値は計量不可能

#### 消費の舞台

